（別紙様式）

都道府県番号	２８
都道府県名	兵庫県

（①☑　②□　③□）
※該当する観点にチェックをすること

Ⅰ．学校名及び規模

神戸市立　須佐野中学校（フロンティアスクール名）										
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数	
学級数	3	3	3				1	１０		
生徒数	９４	９０	９６				4	２８４	２４	

Ⅱ．実践研究の概要（主題（テーマ）及び設定の趣旨）

・主題（テーマ）
　少人数授業における評価を生かした教材開発
・テーマ設定の趣旨
　きめ細かい指導を行うことを目的として，少人数授業は行われている。そこでは，生徒の実情にあった指導がなされなくてはならず，そのために欠かせないのが個々の生徒を対象とした評価である。評価を生かしたきめ細かい指導を行うための教材開発を進めていく。

Ⅲ．実践研究の内容について

（ⅰ）研究体制の工夫

本校では，少人数授業を通して，きめ細かい指導を行い，基礎学力の向上を図るというテーマに取り組んでいる。少人数授業については平成１３年度から行っているが，１４年度は人員にも恵まれたため，数学と英語において全学年の全学級で２人ずつの当該教科の教師を配置して少人数授業を行うことができた。１３年度からの取り組みを行うにあたり，「新学習システム推進委員会」を発足させ，少人数へのグループ分け，授業のスタイル，教師の配置について協議した。どの学級においても生徒の状況に応じて２つの学習集団に分けること，授業の最初から最後まで分けるのではなく，どこかの時点では合同で共通理解や共通評価を行う場を設けることを基本的なスタイルとした。細部については，配置された教師が，各学年の当該教科ごとに協議して進めることにした。

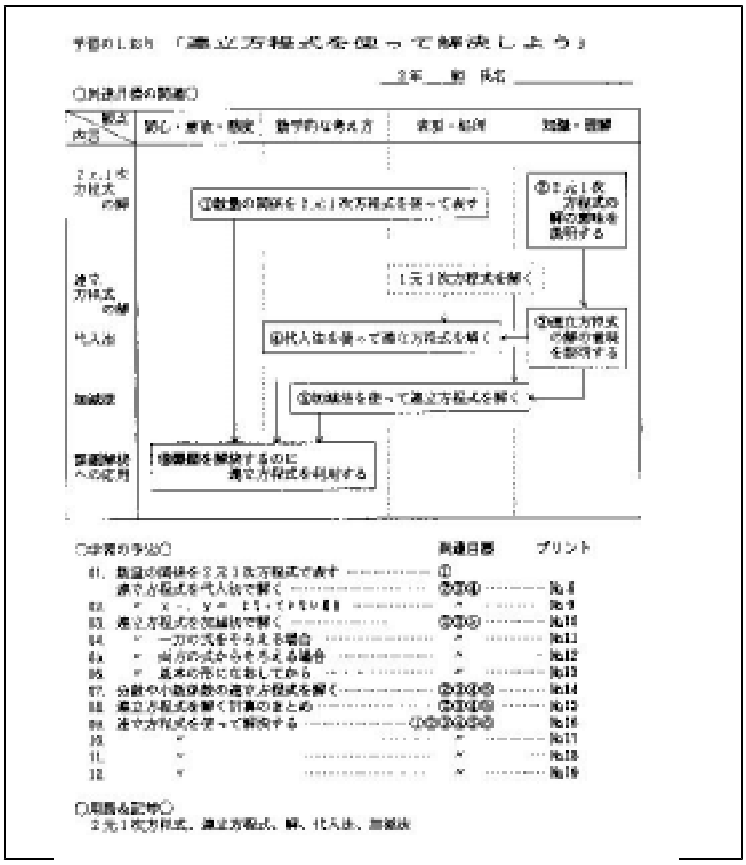
（ⅱ）実践研究の内容

ここでは，１４年度の２年生の数学での取り組みについて記述する。２年生所属の数学教師を中心に，１年生から１名（１，２組担当），３年生から１名（３組担当）

の応援を得て，１年間取り組んだ。

（１）学習のしおり

教科を通じて，生徒につけたい力を確認するために「学習のしおり」を作成している。ここに示したのは連立方程式の単元のものである。



教師にとっては，数学を指導していく上での計画書であり，生徒にとっては学習のための案内マップである。「到達目標」は，この単元でどんなことができるようになればよいかを示している。図中の矢印は，それぞれの到達目標が，互いにどんなつながりを持っているかを表している。教科の４つの観点との関連も示したつもりである。この「学習のしおり」は，単元の学習が始まる最初の時間に生徒に配布し，ノートの単元の始まるところに貼らせ，大まかな説明をしている。そこには，これからの学習の予定が書かれているので，予習に役立てるように伝えている。

（２）実際の授業

単元の最初の授業では，生徒全員に共通の概念をもたせておく必要があるため，少人数集団に分けないで，合同で授業を行った。

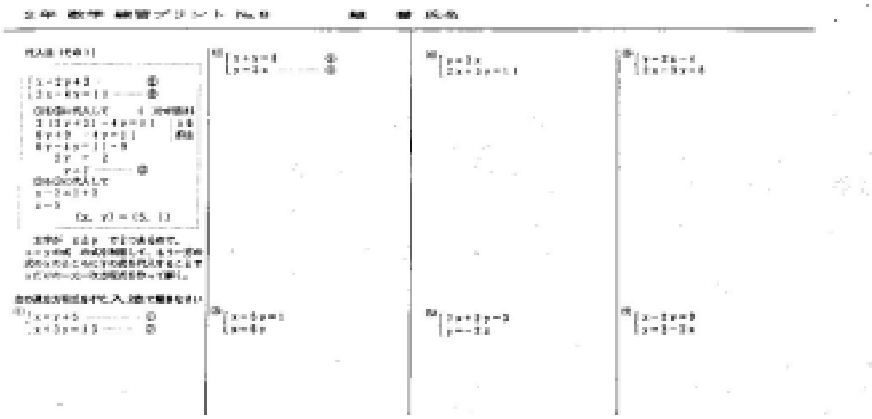
第２時以後の授業の初めには，前時の内容について５分間程度の小テストを行った。テストの内容は「学習のしおり」の到達目標に関係する問題である。

この小テストを行うことで，前時の内容の確認をすると同時に，
それぞれの生徒の理解の度合いを測ることができた。
記録にはとどめないが，教師はめぼしい生徒を記憶しておいて，
少人数におけるその後の授業に生かすことができた。

小テスト
教室移動
少人数授業
練習問題

小テストの後，学級の半数の生徒は，別教室へ移動する。
それぞれの教室で，生徒たちは少人数で，前時の内容を発展させた新しい内容について説明を聞き，考え，生徒たちは理解を確かめるために練習問題プリント（Ｂ４サイズ）に取り組んだ。分かったつもりでも実際に問題を解こうとすると分からないことがよくある。教師は１５～１６名の机の間を回りながら，質問を受けたり，細かい指示を出したりしながら，評価と指導を同時に行った。

練習プリントの一例



（iii）成果と課題

生徒たちからアンケートをとり，少人数授業についての感想をまとめた。

少人数は集中できてわかりやすい・・・・・・・６３％
少人数は、質問がしやすい・・・・・・・・・・・５８％
練習をするときは少人数が適している・・・・・６５％
教わるときは少人数が適している・・・・・・・５８％
先生により教え方が違う感じがして不安・・・・６２％

(成果)

① 個々の生徒に目が届きやすく、学習状況が把握しやすい指導ができた。
② 生徒が気持ちを集中しやすく、理解の度合いが高まった。
③ 授業の内容がわかりやすいことから、学習意欲が継続している。

（課題）

① 学習する内容が、集団によって微妙に異なることがあった。
② 指導の方法が教師によって異なることがあり、生徒に戸惑いが見られた。
③ 小テスト後の教室移動のときは、時間のロスがあった。

他の学年の教師と組んでの授業であるので，各学年での野外活動や修学旅行の前後，および，体育会や文化祭の練習期間中には当該教師の応援が得られなかった。その他にも所属学年の方で手が離せないことがあり，少人数授業の形態がとれないときが少なからずあった。１人でも２人でもできる授業の形を用意しておくことが必要であると痛感した。それでも，少人数授業の方が生徒には歓迎されていることがわかった。

（iv）成果の普及方策

・神戸市内の中学校を対象に実践報告
　平成１４年１０月１５日　神戸市総合教育センター
・「神戸市学力向上フロンティア事業の実践報告研究まとめ」の原稿作成
　平成１５年２月５日付けで神戸市教育委員会へ報告済み
・全国からの視察に対応
　平成１４年６月１８日　高知市立愛宕中学校より来校
　平成１５年２月１４日　浜松市立蜆塚中学校より来校